

倫敦塔

夏目漱石

青空文庫

二年の留学中ただ一度倫敦塔を見物した事がある。その後再び行こうと思つた日もあるがやめにした。人から誘われた事もあつた。一度で得た記憶を二返目に打壊わすのは惜しい、三たび目に拭い去るのはもつとも残念だ。「塔」の見物は一度に限ると思う。

行つたのは着後間もないうちの事である。その頃は方角もよく分らんし、地理などは固より知らん。まるで御殿場の兎が急に日本橋の真中へ抛り出されたような心持ちであつた。表へ出れば人の波にさらわれるかと思ひ、家に帰れば汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑ひ、朝夕安き心はなかつた。この響き、この

群集の中に二年住んでいたら吾が神経の纖維もついに鍋の中の
麩海苔のごとくべとべとになるだろうとマクス・ノルダウの退化
論を今さらのごとく大真理と思う折さえあつた。

しかも余は他の日本人のごとく紹介状を持つて世話になりに行
く宛もなく、また在留の旧知としては無論ない身の上であるから、
恐々ながら一枚の地図を案内として毎日見物のためもしくは用
達のため出あるかねばならなかつた。無論汽車へは乗らない、

馬車へも乗れない、滅多な交通機関を利用しようとする、どこ
へ連れて行かれるか分らない。この広い倫敦を蜘蛛手十字に往
来する汽車も馬車も電気鉄道も鋼条鉄道も余には何らの便宜をも
与える事が出来なかつた。余はやむを得ないから四ツ角へ出るた

びに地図を披ひらいて通行人に押し返されながら足の向く方角を定める。地図で知れぬ時は人に聞く、人に聞いて知れぬ時は巡査を探す、巡査でゆかぬ時はまたほかの人に尋ねる、何人でも合点がてんの行く人に出逢うまでは捕えては聞き呼び掛けては聞く。かくしてようやくわが指定の地に至るのである。

「塔」を見物したのはあたかもこの方法に依らねば外出の出来ぬ時代の事と思う。来るきたに來らい所しよなく去きよ所しよを知らずと云いうと禪語ぜんごめくが、余はどの路を通つて「塔」に着したかまたいかなる町を横ぎつて吾家わがやに帰ったかいまだに判然しない。どう考えても思い出せぬ。ただ「塔」を見物しただけはたしかである。「塔」その物の光景は今でもありありと眼に浮べる事が出来る。前はと

問われると困る、後あとはと尋ねられても返答し得ぬ。ただ前を忘れ後しつを失したる中間が会えしやく釈もなく明るい。あたかも闇を裂さく稲妻の眉に落つると見えて消えたる心地こころちがする。倫敦塔ロンドンとうは宿世すくせの夢の焼しょうてん点てんのようだ。

倫敦塔の歴史は英国の歴史を煎せんじ詰めたものである。過去と云う怪あやしき物を蔽おほえる戸帳とばりが自おのずと裂けて龕がん中の幽光ゆうこうを二十世紀の上に反射するものは倫敦塔である。すべてを葬る時の流れが逆さかしまに戻つて古代の一片が現代に漂ただよい来れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬、車、汽車の中に取り残されたるは倫敦塔である。

この倫敦塔を塔とうきよう橋きようの上からテムス河を隔てて眼の前に望

んだとき、余は今の人はた古えいにしへの人かと思うまで我を忘れて余念もなく眺め入った。冬の初めとはいいなから物静かな日である。空は灰汁桶あくおけを掻き交まぜたような色をして低く塔の上に垂れ懸っている。壁土を溶とかし込んだように見ゆるテムスの流れは波も立てず音もせず無理矢理むりやりに動いているかと思わるる。帆懸舟ほかけぶねが一隻せき塔の下に行く。風なき河に帆をあやつるのだから不規則な三角形の白き翼がいつまでも同じ所に停とまっているようである。伝馬てんまの大きいのが二艘上そのぼつて来る。ただ一人の船頭せんどうが艫しもに立たつて艫を漕こぐ、これもほとんど動かない。塔橋の欄干らんかんのあたりには白き影がちらちらする、大方おおかた鷗かもめであろう。見渡したところすべての物が静かである。物憂ものうげに見える、眠っている、皆過去の感じであ

る。そうしてその中に冷然と二十世紀を輕蔑するけいべつように立つて
いるのが倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、いやしくも歴
史の有らん限りは我のみはかくてあるべしと云わぬばかりに立つ
ている。その偉大なるには今さらのように驚かれた。この建築を
俗に塔と称とえているが塔と云うは単に名前のみで実は幾多いくたの櫓やぐらか
ら成り立つ大きな地城じしろである。並びそび聳ゆる櫓には丸きもの角張かくばり
たるものいろいろの形状はあるが、いずれも陰気な灰色をして前
世紀の紀念きねんを永劫えいごうに伝えんと誓えるごとく見える。九段くだんの遊ゆうし
就館ゆうかんを石で造つて二三十並べてそうしてそれを虫眼鏡むしめがねで覗のぞ
いたらあるいはこの「塔」に似たものは出来上りはしまいかと考
えた。余はまだ眺ながめている。セピヤ色の水分をもつて飽和ほうわしたる

空気の中にぼんやり立って眺めている。二十世紀の倫敦がわが心の裏うちから次第に消え去ると同時に眼前の塔影まぼろしが幻のごとき過去の歴史を吾が脳裏のうりに描えがき出して来る。朝起きて啜すする渋茶に立つ煙りの寝足ねたらぬ夢の尾を曳ひくように感ぜらるる。しばらくすると向う岸から長い手を出して余を引張ひっぱるかあやと怪あやしまれて来た。今まで佇ちよりつ立して身動きもしなかつた余は急に川を渡つて塔に行きたくなつた。長い手はなおなお強く余を引く。余はたちまち歩を移して塔橋を渡り懸けた。長い手はぐいぐい牽ひく。塔橋を渡つてからはいちもくさん一目散に塔門まで馳はせ着けた。見る間に三万坪に余る過去の一いちちだいじしやく大磁石は現世げんせに浮游ふゆうするこの小鉄屑しょうてつくずを吸収しおわつた。門はいを入つて振り返つたとき、

憂うれいの国に行かんとするものはこの門を潜くぐれ。

永劫えいこくの呵責かしやくに遭あわんとするものはこの門をくぐれ。

迷惑めいわくの人と伍ごせんとするものはこの門をくぐれ。

正義せいぎは高たかき主しゆを動かし、神威しんいは、最上さいじやうち智ちは、最初さいしよあい愛あいは、

われを作る。

我が前まへに物ものなしただ無窮むきゆうあり我は無窮むきゆうに忍しのぶものなり。

この門を過すぎんとするものはいつさいの望のぞみを捨すてよ。

とじう句こうがどごぞで刻きざんではなないかと思おもつた。余あまはこの時ときすでに常じやうたい態たいを失うしなつている。

空からほり濠ほにかけてある石橋せききうを渡わたつて行いくと向むかうに一つひとつの塔たかがある。

これは丸まる形がたの石造せきぞうで石油せきとうタンクたの状じやうをなしてああたかも巨人きじんの

門柱のごとく左右に屹きつりつ立している。その中間を連つらねている建物
 の下を潜くぐつて向むへ抜ける。中塔とはこの事である。少し行くと左
 手に鐘塔しゆとうが峙そばだつ。真鉄まがねの盾たて、黒鉄くろがねの甲かぶとが野おほを蔽おほう秋かげろうの陽あ炎えん
 のごとく見えて敵遠くより寄すると知れば塔上の鐘を鳴らす。星
 黒き夜、壁へき上じょうを歩あむ哨しやう兵へいの隙すきを見て、逃のがれ出でずる囚人の、
 逆さかしまに落おつ松たいまつ明あの影かげより闇やみに消きゆるときも塔上の鐘を鳴らす。
 心おこ傲おごれる市民しんみんの、君きみの政まつりごと非ひなりとて蟻ありのごとく塔下たかに押おし寄よせて
 犇ひしめき騒さわぐときもまた塔上の鐘を鳴らす。塔上の鐘は事あれば必
 ず鳴らす。ある時は無二むにに鳴らし、ある時は無三むさんに鳴らす。祖そ来きた
 る時は祖そを殺ころしても鳴らし、仏ぶつ来きたる時は仏ぶつを殺ころしても鳴らした。
 霜しもの朝あした、雪ゆうの夕べ、雨あめの日ひ、風かぜの夜よを何なんべんとなく鳴らした鐘は今

いずこへ行つたものやら、余が頭をあげて蔦に古りたる櫓を見上げたときは寂然としてすでに百年の響を収めている。

また少し行くと右手に逆賊門がある。門の上には聖タマス塔が聳えている。逆賊門とは名前からがすでに恐ろしい。古来から塔中に生きながら葬られたる幾千の罪人は皆舟からこの門まで護送されたのである。彼らが舟を捨ててひとたびこの門を通過するやいなや娑婆の太陽は再び彼らを照らさなかつた。チームスは彼らにとつての三途の川でこの門は冥府に通ずる入口であつた。彼らは涙の浪に揺られてこの洞窟のごとく薄暗きアーチの下まで漕ぎつけられる。口を開けて鰯を吸う鯨の待ち構えている所まで来るやいなやキーと軋る音と共に厚樑の扉は彼らと浮世の光

りとを長えとこしに隔へだてる。彼らはかくしてついに宿命の鬼の餌食えじきとなる。明日あす食あさわれるか明後日あさつて食あさわれるかあるいはまた十年のちの後に食あさわれるか鬼よりほかに知るものはない。この門に横よこ付づけにつく舟の中に坐ましている罪人の途中の心はどんなであつたらう。權かがしいわる時し、雫しずくが舟ふなべり縁しに滴したたる時、漕こぐ人の手の動く時ごとに吾が命を刻うまるるように思おもつたであらう。白ひき髭げを胸むねまで垂ゆれて寛ゆるやかに黒くろの法衣ほうえを纏まとえる人がよろめきながら舟から上ある。これは大僧正だいそうじょうクランマーである。青あおき頭巾ずきんを眉深まゆかに被かぶり空色あざの絹きぬの下したに鎖くさり帷かたびら子こをつけた立派たてりな男おとこはワイアットであらう。これは会え釈しゃくもなく舷ふなべりから飛あび上ある。はなやかな鳥の毛けを帽ぼうに挿さして黄金こがね作りの太刀たちの柄えに左ひだりの手てを懸かけ、銀ぎんの留とどめ金かねにて飾かれる靴くつの爪先つまさきを、

輕かろげに石段の上に移すのはローリーか。余は暗きアーチの下を覗のぞいて、向う側には石段を洗う波の光の見えはせぬかと首を延ばした。水はない。逆賊門とテムス河とは堤防工事の竣しゅんこう功以来全く縁がなくなつた。幾多いくたの罪人を呑み、幾多の護送船を吐き出した逆賊門は昔むかしの名残なごりにその裾すそを洗う笹ささ波なみの音を聞く便たよりりを失つた。ただ向う側に存する血塔けつとうの壁上おおいに大なる鉄環てつかんが下がつているのみだ。昔しは舟ともづなの纜つなをこの環かんに繋つないだといふ。

左ひだりへ折れて血塔の門に入る。今は昔し薔薇しょうびの乱らんに目に余る多くの人を幽閉したのはこの塔である。草のごとく人を薙なぎ、鶏とりのごとく人を潰つぶし、乾から鮭さけのごとく屍しかばねを積んだのはこの塔である。血塔と名をつけたのも無理はない。アーチの下に交番のような箱

があつて、その側らかたわに 甲形かぶとがたの帽子をつけた兵隊が銃を突いて立っている。すこぶる真面目まじめな顔をしているが、早く当番を済まして、例の酒舗しゅぽで一杯傾けて、一件いっけんにからかつて遊びたいという人相である。塔の壁は不規則な石を畳み上げて厚く造つてあるから表面は決して滑なめらかではない。所々に蔦つたがからんでいる。高い所に窓が見える。建物の大きいせいから下から見るとはなはだ小さい。鉄の格子こうしがはまつているようだ。番兵が石像のごとく突立ちながら腹の中で情婦とふざけている傍らかたわに、余は眉まゆを攢あつめ手をかざしてこの高窓を見上げて佇たたずむ。格子を洩もれて古代の色硝子いろガラスに微かすかなる日影がさし込んできらきらと反射する。やがて煙のごとき幕あが開いて空想の舞台がありありと見える。窓の内側うちがわは厚き戸と

帳ぼりが垂れて昼もほの暗い。窓に對する壁は漆しつ喰くいも塗らぬ丸まるはだ
 裸かの石で隣りの室とは世界滅却せかいめつきやくの日に至るまで動かぬ仕切しき
 りが設けられている。ただその真中まんなかの六畳ばかりの場所は沓さえ
 ぬ色のタペストリで蔽おおわれている。地じは納戸色なんどいろ、模様は薄うすき黄き
 で、裸体の女神めがみの像と、像の周圍に一面に染め抜いた唐草からくさであ
 る。石壁いしかべの横には、大きな寢台ねだいが横よこたわる。厚あつがし樫しんの心しんも透とおれと
 深く刻みつけたる葡萄ぶどうと、葡萄の蔓つると葡萄の葉が手足の触ふる場
 所だけ光りを射返す。この寢台ねだいの端はじに二人ふたりの小児しょうにが見えて来た。
 一人は十三四、一人は十歳とおくらいと思われる。幼なき方は床とこに腰
 をかけて、寢台の柱に半なかば身を倚もたせ、力なき両足をぶらりと下
 げている。右の肱ひじを、傾けたる顔と共に前に出して年とし嵩かさなる人

の肩に懸ける。年上なるは幼なき人の膝の上に金きんにて飾れる大きな書物を開ひらけて、そのあけてある頁ページの上に右の手を置く。象牙ぞうげを揉もんで柔やわらかにしたるごとく美しい手である。二人とも烏からすの翼あざむを欺あざむくほどの黒くろき上衣うわぎを着ているが色が極めて白いので一段と目立つ。髪かみの色、眼まなこの色、さては眉根まゆね鼻付はなつきから衣い装しょうの末すえに至るまで両ふ人たり共ともほとんど同じように見えるのは兄弟だからであろう。

兄あにが優しく清らかな声で膝の上なる書物を読む。

「我が眼の前に、わが死ぬべき折まがひの様ようを想おもい見みる人こそ幸さいちあれ。

日毎夜毎に死しなんと願ねがえ。やがては神かみの前まへに行くなる吾われの何なにを恐おそるる……」

弟あには世よに憐あはれなる声こゑにて「アーメン」と云いう。折まがひから遠とほくより吹ふ

く木枯^{こから}しの高き塔を撼^{ゆる}がして一度^{ひとた}びは壁も落つるばかりにゴーと鳴る。弟はひたと身を寄せて兄の肩に顔をすりつける。雪のごとく白い蒲団^{ふとん}の一部がほかと膨^{ふく}れ返^{かえ}る。兄はまた読み初める。

「朝ならば夜の前に死ぬと思え。夜ならば翌^{あす}日ありと頼むな。覚悟をこそ尊^{とうと}べ。見苦しき死に様^{さま}ぞ恥の極みなる……」

弟また「アーメン」と云う。その声は顫^{ふる}えている。兄は静かに書をふせて、かの小さき窓の方^{かた}へ歩みよりて外^との面^もを見ようとす。窓が高く背^せが足りぬ。床^{しょうぎ}几^ぎを持って来てその上につまだつ。百里をつつむ黒霧^{こくむ}の奥にぼんやりと冬の日が写る。屠^{ほぶ}れる犬の生^い血^ちにて染め抜いたようである。兄は「今日^{きょう}もまたこうして暮れるのか」と弟^{かえり}を顧みる。弟はただ「寒い」と答える。「命さえ助け

てくるるなら伯父様に王の位を進ぜるものを」と兄が独り言のよ
うにつぶやく。弟は「母様に逢いたい」とのみ云う。この時向
うに掛っているタペストリに織り出してある女神の裸体像が風も
ないのに二三度ふわりふわりと動く。

忽然舞台が廻る。見ると塔門の前に一人の女が黒い喪服を着
て悄然として立っている。面影は青白く窶れてはいるが、
どことなく品格のよい気高い婦人である。やがて錠のきしる音が
してぎいと扉が開くと内から一人の男が出て来て恭しく婦人の前
に礼をする。

「逢う事を許されてか」と女が問う。

「否」と気の毒そうに男が答える。「逢わせまつらんと思えど、

公おきてけの掟あきりなればせひなしと諦わたくしなめたまえ。私まの情な売りるは安まき間の事ことにてあれど」と急に口くちを緘つぐみてあたりを見渡ほりす。濠ほりの内うちからかいつづりがひよいと浮うき上ある。

女うなじは頸うなじに懸かけたる金きんの鎖くさりを解といて男おとこに与たまへて「ただ束つかの間まを垣か間いま見みんとの願ねがひなり。女にょにん人にんの頼たのみ引ひき受うけぬ君きみはつれなし」と云いう。

男おとこは鎖くさりりを指ゆびの先さきに巻まきつけて思おも案あんの体ていである。かいつづりはふいと沈しずむ。ややありていう「牢ろう守もりは牢ろうの掟おきてを破やぶりがたし。御み子こらは変かる事ことなく、すこやかに月つき日を過すさせたまう。心安おほく覺おぼして歸かへりたまえ」と金かねの鎖くさりりを押お戻もす。女おんなは身み動うきもせぬ。鎖くさりばかりは敷しき石いしの上うへに落おちて鏘そう然ぜんと鳴なる。

「いかにしても逢う事は叶わずや」と女が尋ねる。

「御氣の毒なれど」と牢守が云い放つ。

「黒き塔の影、堅き塔の壁、寒き塔の人」と云いながら女はさめざめと泣く。

舞台がまた変る。

丈の^{たけ}高い黒装束^{くろしょうぞく}の影が一つ中庭の隅にあらわれる。苔寒^{こけ}き

石壁^{いし}の中からスーと抜け出たように思われた。夜と霧との境に立つて朦朧^{もうろう}とあたりを見廻す。しばらくすると同じ黒装束の影が

また一つ陰の底から湧^わいて出る。櫓^{やぐら}の角に高くかかる星影を仰い

で「日は暮れた」と背^せの高いのが云う。「昼の世界に顔は出せぬ」

と一人が答える。「人殺しも多くしたが今日ほど寢覚^{ねざめ}の悪い事は

またとあるまい」と高き影が低い方を向く。「タペストリの裏で二人の話しを立ち聞きした時は、いつその事止めて帰ろうかと思うた」と低いのが正直に云う。「絞める時、花のような唇がぴりぴりと顫うた」「透き通るような額に紫色の筋が出た」「あの唸った声がまだ耳に付いている」。黒い影が再び黒い夜の中に吸い込まれる時櫓の上で時計の音があんと鳴る。

空想は時計の音と共に破れる。石像のごとく立っていた番兵は銃を肩にしてコトリコトリと敷石の上を歩いている。あるきながら一件と手を組んで散歩する時を夢みている。

血塔の下を抜けて向へ出ると奇麗な広場がある。その真中が少し高い。その高い所に白塔がある。白塔は塔中のもっとも古き

もので昔むかしの天主である。豎たて二十間、横十八間、高さ十五間、壁の厚さ一丈五尺、四方に角すみやぐら楼そびが聳えて所々にはノーマン時代の銃じゆうがん眼がんさえ見える。千三百九十九年国民が三十三カ条の非を挙げてリチャード二世に讓じょうい位をせまったのはこの塔中である。僧侶、貴族、武士、法士の前に立って彼が天下に向って讓位を宣告したのはこの塔中である。その時讓りを受けたるヘンリーは起たつて十字を額と胸に画して云う「父と子と聖靈の名によつて、我れヘンリーはこの大英国の王冠と御代とを、わが正しき血、恵みある神、親愛なる友の援たすけを藉かりて襲つぎ受く」と。さて先王の運命は何なんびと人も知る者がなかつた。その死骸がポント・フラクト城より移されて聖セントポール寺に着した時、二万の群集は彼の屍しかばねめくを繞つて

その骨立せる面影に驚かされた。あるいは云う、八人の刺客がリチャードを取り巻いた時彼は一人の手より斧を奪いて一人を斬り二人を倒した。されどもエクストンが背後より下せる一撃のためについに恨を呑んで死なれたと。ある者は天を仰いで云う「あらずあらず。リチャードは断食をして自らと、命の根をたたれたのじや」と。いずれにしてもありがたいたくない。帝王の歴史は悲惨の歴史である。

階下の一室は昔しオルター・ロリーが幽囚の際万国史の草を記した所だと云い伝えられている。彼がエリザ式の半ズボンに絹の靴下を膝頭で結んだ右足を左りの上へ乗せて鷺ペンの先を紙の上へ突いたまま首を少し傾けて考えているところを想像

して見た。しかしその部屋は見る事が出来なかつた。

南側から入つて螺旋状らせんじょうの階段を上るとここのぼに有名な武器陳列

場がある。時々手を入れるものと見えて皆ぴかぴか光っている。

日本におつたとき歴史や小説で御目にかかるだけでいっこう要領を得なかつたものが一々明瞭になるのははなはだ嬉しい。しかし嬉しいのは一時の事で今ではまるで忘れてしまつたからやはり同じ事だ。ただなお記憶に残っているのが甲かちゅう胃ういである。その中

でも実に立派だと思つたのはたしかヘンリー六世の着用したものと覚えている。全体が鋼鉄製で所々に象嵌ぞうがんがある。もつとも驚

くのはその偉大な事である。かかる甲冑を着けたものは少なくとも身の丈七尺たけくらいの大男でなくてはならぬ。余が感服してこの

甲冑を眺め^{なが}ているとコトリコトリと足音がして余の傍へ歩^{そば}いて来るものがある。振り向いて見るとビーフ・イーターである。ビーフ・イーターと云うと始終牛でも食^{ぎゆう}っている人のように思われるがそんなものではない。彼は倫敦塔の番人である。絹^{シルク}帽^{ハット}を漬^{つぶ}したような帽子を被^{かぶ}つて美術学校の生徒のような服を纏^{まと}うている。太^{そで}い袖の先を括^{くく}つて腰のところを帯でしめている。服にも模様がある。模様は蝦夷人^{えぞじん}の着る半纏^{はんてん}についているようなすこぶる單純の直線を並べて角形^{かくがた}に組み合わせたものに過ぎぬ。彼は時として槍^{やり}をさ^{たず}え携^さえる事がある。穂の短かい柄^えの先^{さき}に毛の下がった^{さんごくし}三^{さん}国^{こく}志^しにでも出^でそうな槍をもつ。そのビーフ・イーターの一人が余の後ろ^{うし}に止^とまった。彼はあまり背^せの高くない、肥^{ふと}り肉^{じし}の白^{しろひ}

髯げの多いビーフ・イーターであった。「あなたは日本人ではありませんか」と微笑しながら尋ねる。余は現今の英国人と話をしている気がしない。彼が三四百年の昔からちよつと顔を出したかまたは余が急に三四百年の古いにしえを覗のぞいたような感じがする。余は黙もくして軽かろくうなずく。こちらへ来たまえと云うから尾ついて行く。彼は指をもつて日本製の古ぐき具足そくを指して、見たかと云わぬばかりの眼つきをする。余はまただまつてうなずく。これは蒙古もうこよりチャーレス二世に献けんじょう上じやうになつたものだどビーフ・イーターが説明をしてくれる。余は三たびうなずく。

白塔を出てボーシヤン塔に行く。途中ぶんどりに分捕の大砲が並べてある。その前の所が少しばかり鉄柵てつさくに囲かこい込んで、鎖の一部に

札が下さがつている。見ると仕置場しおきばの跡とある。二年も三年も長いのは十年も日の通かよわぬ地下の暗室に押し込められたものが、ある日突然地上に引き出さるるかと思うと地下よりもなお恐しきこの場所へただ据すえらるるためであつた。久しぶりに青天を見て、やれ嬉しやと思うまもなく、目がくらんで物の色さえ定かには眸ぼうち中ゆうに写らぬ先に、白き斧おのの刃はがひらりと三尺くうの空を切る。流れる血は生きているうちからすでに冷めたかつたであらう。鳥が一つつびき正下りている。翼つばさをすくめて黒い嘴くちばしをとがらせて人を見る。百年碧へきけつ血の恨うらみが凝こつて化鳥けちようの姿となつて長くこの不吉な地を守るような心地がする。吹く風に楡にれの木がざわざわと動く。見ると枝の上にも鳥がいる。しばらくするとまた一羽飛んでくる。どこ

から来たか分らぬ。傍そばに七つばかりの男の子を連れた若い女が立
つて烏を眺ながめている。希臘風ギリシヤふうの鼻と、珠たまを溶といたようにうるわ
しい目と、真白な頸筋くびすじを形づくる曲線のうねりとが少からず余
の心を動かした。小供は女を見上げて「鴉からすが、鴉からすが」と珍らしそ
うに云う。それから「鴉さが寒さむそうだから、麵麩パンをやりたい」と
ねだる。女は静かに「あの鴉は何にもたべたがっついていやしません」
と云う。小供は「なぜ」と聞く。女は長い睫まつげの奥ただよに漾たうているよ
うな眼で鴉を見詰めながら「あの鴉は五羽います」といったぎり
小供の問には答えない。何か独ひとりで考えているかと思わるるくら
い澄すましている。余はこの女とこの鴉の間に何か不思議の因縁いんねんで
もありはせぬかと疑った。彼は鴉の気分をわが事のごとくに云い、

三羽しか見えぬ鴉を五羽いると断言する。あやしき女を見捨てて余は独りボーシヤン塔に入る。

倫敦塔の歴史はボーシヤン塔の歴史であつて、ボーシヤン塔の歴史は悲酸ひさんの歴史である。十四世紀の後半にエドワード三世の建こ立んりゆうにかかるとこの三層塔の一階室に入るものはその入るの瞬間

において、百代の遺恨いこんを結晶したる無数の紀念きねんを周囲の壁上に認むるのであろう。すべての怨うらみ、すべての憤いきどおり、すべての憂うれいと悲かなしみとはこの怨えん、この憤、この憂と悲の極端より生ずる慰藉いしやと共に九十一種の題辞となつて今になお観みる者の心を寒からしめている。冷やかなる鉄筆に無情の壁を彫つてわが不運と定じようごう業ごうとを天地の間に刻きざみつけたる人は、過去という底なし穴に葬られて、空しき文も

字んじのみいつまでも娑婆しやばの光りを見る。彼らは強みずかいて自らを愚弄ぐろうするにあらざやと怪あやしまれる。世よに反語はんごというがある。白しろというて黒くろを意味いし、小しょうと唱となえて大だいを思おもわしむ。すべての反語はんごのうち自らみずか知らずして後世こうせいに残のこす反語はんごほど猛烈めんりゃくなるはまたとあるまい。墓碣ぼけつと云いい、紀念碑きねんびと云いい、賞しょう牌はいと云いい、綬じゆう賞しょうと云いいこれららが存在そんざいする限りは、空むなしき物質ぶつに、ありし世よを偲しのばしむるの具ぐとなるに過ぎすぎない。われは去いる、われを伝つたうるものは残のこると思おもうは、去いるわれを傷いたましむる媒介物ばいかいぶつの残のこる意いにて、われその者の残のこる意いにあらざるを忘わすれたる人の言葉ことばと思おもう。未来みらいの世よまで反語はんごを伝つたえて泡沫ほうまつの身みを嘲あざける人のなす事ことと思おもう。余あまは死ぬしぬ時に辞世じせいも作つくるまい。死あんだ後あとは墓碑ぼひも建たててもらもらうまい。肉にくは焼やき骨こは粉こなに

して西風の強く吹く日大空に向つて撒き散らしてもらおうなどといらざる取越苦勞をする。

題辭の書体は固より一様でない。あるものは閑に任せて叮嚀な楷書を用い、あるものは心急ぎてか口惜し紛れかがりがりと壁を搔いて擲り書きに彫りつけてある。またあるものは自家の紋章を刻み込んでその中に古雅な文字をとどめ、あるいは盾の形を描いてその内部に読み難き句を残している。書体の異なるように言語もまた決して一様でない。英語はもちろんの事、以太利語もラテン語もある。左り側に「我が望は基督にあり」と刻されたのはパスリユという坊様の句だ。このパスリユは千五百三十七年に首を斬られた。その傍に JOHAN DECKER と云う署名がある。

デッカーとは何者だか分らない。階段を上つて行くと戸の入口に「F.C.」というのがある。これも頭文字だけで誰やら見当がつかぬ。それから少し離れて大變綿密なのがある。まず右の端に十字架を描いて心臓を飾りつけ、その脇に骸骨と紋章を彫り込んでいる。少し行くと盾の中に下のような句をかき入れたのが目につく。「運命は空しく我をして心なき風に訴えしむ。時も摧けよ。わが星は悲かれ、われにつれなかれ」。次には「すべての人を尊べ。衆生をいつくしめ。神を恐れよ。王を敬え」とある。

こんなものを書く人の心の中はどのようなであつたらうと想像して見る。およそ世の中に何が苦しいと云つて所在のないほどの苦しみはない。意識の内容に変化のないほどの苦しみはない。使え

る身体は目に見えぬ縄で縛られて動きのとれぬほどの苦しみはない。生きるというは活動しているという事であるに、生きながらこの活動を抑えらるるのは生という意味を奪われたると同じ事で、その奪われたを自覚するだけが死よりも一層の苦痛である。この壁の周囲をかくまでに塗抹した人々は皆この死よりも辛い苦痛を嘗めたのである。忍ばるる限り堪えらるる限りはこの苦痛と戦つた末、いても起つてもたまらなくなつた時、始めて釘の折や鋭どき爪を利用して無事の内に仕事を求め、太平の裏に不平を洩らし、平地の上に波瀾を画いたものであろう。彼らが題せる一字一画は、
号泣、涕涙、その他すべて自然の許す限りの排悶的手段を尽したる後なお飽く事を知らざる本能の要求に余儀なくせられ

たる結果であろう。

また想像して見る。生れて来た以上は、生きねばならぬ。あえて死を怖るるとは云わず、ただ生きねばならぬ。生きねばならぬと云うは耶蘇孔子ヤソこうし以前の道で、また耶蘇孔子以後の道である。何りくつの理窟も入らぬ、ただ生きたいから生きねばならぬのである。すべての人は生きねばならぬ。この獄つなに繋がれたる人もまたこの大道に従つて生きねばならなかつた。同時に彼らは死ぬべき運命を眼前ひかに控えておつた。いかにせば生き延びらるるだらうかとは時々刻々彼らの胸きようり裏うらに起る疑問であつた。ひとたびこの室へやに入るものは必ず死ぬ。生きて天日を再び見たものは千人ひとりに一人しかない。彼らは遅かれ早かれ死なねばならぬ。されど古今わたに亘る大真

理は彼らに誨おしえて生きよと云う、飽あくまでも生きよと云う。彼ら
 はやむをえず彼らの爪を磨といだ。尖とがれる爪の先をもつて堅き壁
 の上に一と書いた。一をかける後のちも真理は古いにしえのごとく生きよと
 囁ささやく、飽くまでも生きよと囁く。彼らは剥はがれたる爪の癒いゆるを
 待つて再び二とかいた。斧おのの刃はに肉飛び骨摧くだける明日あすを予期した
 彼らは冷やかなる壁の上にただ一となり二となり線となり字とな
 つて生きんと願つた。壁の上に残る横よこたて縦たての疵きずは生せいを欲する執しゅう
じやく着くの魂こん魄ぱくである。余が想像の糸をここまでたぐつて来た時、
 室内の冷氣が一度に背せの毛穴から身の内に吹き込むような感じが
 して覚えなずぞつとした。そう思つて見ると何だか壁が湿しめつぽい。
 指先で撫なでて見るとぬらりと露にすべる。指先を見まつと真ま赤かだ。

壁の隅からほたりほたりと露の珠たまが垂れる。床の上を見るとその
 滴したたりの痕あとが鮮やかな紅くれないの紋を不規則に連つらねる。十六世紀の血が
 にじみ出したと思う。壁の奥の方から唸うなり声さえ聞える。唸り声
 がだんだんと近くなるとそれが夜を洩もるる凄すげい歌と変化する。こ
 こは地面の下に通ずる穴倉でその内には人が二人ふたりいる。鬼の国か
 ら吹き上げる風が石の壁の破れ目めを通つて小やかなカンテラを煽あお
 るからたださえ暗い室へやの天井も四隅も煤すす色の油煙ゆえんで渦巻うずまいて動
 いているように見える。幽かすかに聞えた歌の音は窖こうちゆう 中ちゆうにいる一
 人の声に相違ない。歌の主ぬしは腕を高くまくつて、大きな斧おのを轆轤ろくろ
 の砥石といしにかけて一生懸命に磨といでいる。その傍そばには一挺ちようの斧おのが抛な
 げ出しているが、風の具合でその白い刃はがぴかりぴかりと光る事

がある。他の一人は腕組をしたまま立つて砥との転まわるのを見ている。髯ひげの中から顔が出ていてその半面をカンテラが照らす。照らされた部分が泥だらけの人にんじん参じんのような色に見える。「こう毎日のように舟から送って来ては、首斬くびきり役も繁はんじょう昌しょうだのう」と髯ひげがいう。「そうさ、斧を磨とぐだけでも骨が折れるわ」と歌の主ぬしが答える。これは背の低い眼の凹くぼんだ煤すすいろ色の男である。「昨日きのうは美しいのをやったなあ」と髯ひげが惜しそうにいう。「いや顔は美しいが頸くびの骨は馬鹿に堅い女だった。御蔭でこの通り刃が一分ばかりか
けた」とやけに轆轤ころを転ころばす、シユシユシユと鳴ある間あいだから火花が
ピチピチと出る。磨とぎ手は声を張り揚あげて歌い出す。

切れぬはずだよ女の頸くびは恋の恨うらみで刃が折れる。

シユシユシユと鳴る音のほかには聴えるものもない。カンテラの光りが風に煽あおられて磨ぎ手の右の頬を射いる。煤すすの上に朱を流したようだ。「あすは誰の番かな」とややありて髯が質問する。「あすは例の婆ばあさま様の番さ」と平気に答える。

生える白髪しらがを浮気うわきが染める、骨を斬しられりや血が染める。

と高調子たかちようしに歌う。シユシユシユと轆轤ろくろが回まわる、ピチピチと火

花が出る。「アハハハもう善よかろう」と斧を振り翳かざして灯影ほかげに刃は

を見る。「婆ばあさま様ぎりか、ほかに誰もいないか」と髯がまた問を

かける。「それから例のがやられる」「気の毒な、もうやるか、

可愛相かわいそうにのう」といえば、「気の毒じゃが仕方がないわ」と真

黒な天井を見て嘯うそぶく。

たちまち^{あな}害も首斬りもカンテラも一度に消えて余はボーシヤン塔の真^{まん}中^{なか}に茫^{ぼう}然^{ぜん}と佇^たんで^ずいる。ふと気がついて見ると傍^{そば}に先^{さき}刻^つ鴉^{から}すに麵^{パン}麩^すをやりたいと云った男の子が立っている。例の怪しい女もものごとくついている。男の子が壁を見て「あそこに犬がかいてある」と驚いたように云う。女は例のごとく過去の権化^{ごんげ}と云うべきほどの屹^{きつ}とした口^{くち}調^{よう}で「犬ではありません。左りが熊、右が獅子^{しし}でこれはダツドレー^け家の紋章です」と答える。実のところ余も犬か豚だと思つていたのであるから、今この女の説明を聞いてますます不思議な女だと思つう。そう云えば今ダツドレーと云つたときその言葉の内に何となく力が籠^{こも}つて、あたかも己^{おの}れの家名^なでも名乗^のつたごとくに感ぜらるる。余は息を凝^こらして両^{ふた}人を注

視する。女はなお説明をつづける。「この紋章を刻んだ人はジョン・ダッドレーです」あたかもジョンは自分の兄弟のごとき語調である。「ジョンには四人の兄弟があつて、その兄弟が、熊と獅子の周囲まわりに刻みつけられてある草花でちやんと分ります」見るとなるほど四通りよとおの花だか葉だかが油絵の枠わくのように熊と獅子を取り巻いて彫ほつてある。「ここにあるのは Acorns で、これは Ambros の事です。こちらにあるのが Rose で Robert を代表するのです。下の方に忍冬にんどうが描かいてあります。忍冬は Honeysuckle だから Henry に当るのです。左りの上に塊かたまっているのが Geranium でこれは G……」と云つたぎり黙もくっている。見ると珊瑚さんごのような唇くちびるが電気でも懸かけたかと思われるまでにぶるぶると顫ふるえている。蝮まむし

が鼠ねずみに向つたときの舌の先のごとくだ。しばらくすると女はこの紋章の下に書きつけてある題辞を朗ほがらかに誦じゆした。

Yow that the beasts do wel behold and se,

May deme with ease wherefore here made they be

Withe borders wherein

4 brothers' names who list to serche the grovnd.

女はこの句を生れてから今日きょうまで毎日日課として暗誦あんしやうしたように一種の口調をもつて誦じゆし了おわつた。実を云うと壁にある字ははなはだ見悪みにくい。余のごときものは首を捻ひねつても一字も読めそうにない。余はますますこの女を怪しく思う。

気味が悪くなつたから通り過ぎて先へ抜ける。

銃眼じゆうがんのある

角を出ると滅茶苦茶めちやくちやに書き綴つづられた、模様だか文字だか分らない中に、正しき画かくで、小く「ジエーン」と書いてある。余は覚えずその前に立留まった。英国の歴史を読んだものでジエーン・グレイの名を知らぬ者はあるまい。またその薄命と無残の最後に同情の涙を濺そそがぬ者はあるまい。ジエーンは義父ぎふと所天おつとの野心のために十八年の春しゆんじゆう、秋を罪なくして惜気おしげもなく刑場に売った。蹂みふ躪にじられたる薔薇ばらの蕊しべより消え難き香かの遠く立ちて、今に至るまで史ひもとを繙ひもとく者をゆかしがらせる。希臘語ギリシヤゴを解しプレートープレーターを読んで一代の碩学せきがくアスカムをして舌を捲まかしめたる逸事は、この詩趣ある人物を想そうけん見するの好材料として何人なんびとの脳裏のうりにも保存せらるるであろう。余はジエーンの名の前に立留ったぎり動かない。

動かないと云うよりむしろ動けない。空想の幕はすでにあいてい
る。

始は両方の眼が霞かすんで物が見えなくなる。やがて暗い中の一点
にパツと火が点ぜられる。その火が次第次第に大きくなって内に
人が動いているような心持ちがする。次にそれがだんだん明るく
なつてちようど双そうがんきよう眼鏡の度を合せるように判然と眼に映じて
来る。次にその景色けしきがだんだん大きくなって遠方から近づいて来
る。気がついて見ると真中に若い女が坐っている、右の端はしには男
が立っているようだ。両方共どこかで見たとやうだなと考えるうち、
瞬またたくまにズツと近づいて余から五六間先ではたと停とまる。男は前
に穴倉うちの裏で歌をうたっていた、眼の凹くぼんだ煤色すすいろをした、背せの

低い奴だ。磨ぎすました斧おのを左手ゆんでに突いて腰に八寸ほどの短刀を
 ぶら下げて身構えて立っている。余は覚ええずギョツとする。女は
 白き手ハンケチ巾で目隠しをして両の手で首を載せる台を探すような風ふ
 情ぜいに見える。首を載せる台は日本の薪割台まきわりだいぐらいの大ききで前
 に鉄の環かんが着いている。台の前部ぜんぶに藁わらが散らしてあるのは流れる
 血を防ぐ要慎ようじんと見えた。背後の壁にもたれて二三人の女が泣き
 崩くずれている、侍女でもあろうか。白い毛裏を折り返した法衣ほうえを
 裾長く引く坊さんが、うつ向いて女の手を台の方角へ導いてやる。
 女は雪のごとく白い服を着けて、肩にあまる金こん色の髪じきを時々雲
 のように揺ゆらす。ふとその顔を見ると驚いた。眼こそ見えね、眉まゆ
 の形、細き面おもて、なよやかなる頸くびの辺あたりに至いたるまで、先刻さつき見た女その

ままである。思わず馳^かけ寄ろうとしたが足が縮^{ちぢ}んで一步も前へ出る事が出来ぬ。女はようやくやく首斬り台を探^{さぐ}り当てて両の手をかける。唇がむずむずと動く。最^{さいぜん}前男の子にダツドレーの紋章を説明した時と寸^{すんぶん}分違わぬ。やがて首を少し傾けて「わが夫^{おつと}ギルドフオード・ダツドレーはすでに神の国に行つてか」と聞く。肩を揺^ゆり越した一^{ひと}握^{にぎ}りの髪が軽^{かろ}くうねりを打つ。坊さんは「知り申さぬ」と答えて「まだ真^{まこと}との道に入りたもう心はなきか」と問う。女^{きつ}屹として「まこととは吾と吾夫^{おつと}の信ずる道をこそ言え。御身達の道は迷いの道、誤りの道よ」と返す。坊さんは何にも言わずにいる。女はやや落ちついた調子で「吾夫が先^{あと}なら追いつこう、後^{あと}ならば誘^{さそ}うて行こう。正しき神の国に、正しき道を踏んで行こう」

と云い終つて落つるがごとく首を台の上に投げかける。眼の凹くぼんだ、煤色すすいろの、背の低い首斬り役が重た氣げに斧をエイと取り直す。余の洋袴ズボンの膝に二三点の血が迸ほとばしると思つたら、すべての光景が忽こっぜん然と消え失うせた。

あたりを見廻わすと男の子を連れた女はどこへ行つたか影さえ見えない。狐ぼに化かされたような顔をして茫ぼうぜん然と塔を出る。帰り道にまた鐘塔しゆとうの下を通つたら高い窓からガイフオークスが稲いなずま妻なずまのような顔をちよつと出した。「今一時間早かつたら……」。

この三本のマツチが役に立たなかつたのは実に残念である」と云う声さえ聞えた。自分ながら少々氣が変だと思つてそこそこに塔を出る。塔橋を渡つて後うしろを顧かえりみたら、北の国の例かこの日もい

つのままにやら雨となつていた。糠粒ぬかつぶを針の目からこぼすような細かいのが満都の紅塵こうじんと煤煙ばいえんを溶かして濛々もうもうと天地を鎖すとぎ裏うちに地獄の影のようにぬつと見上げられたのは倫敦塔であつた。

無我夢中に宿に着いて、主人に今日は塔を見物して来たと話したら、主人が鴉からすが五羽ごういたでしようと云う。おやこの主人もあの女の親類かなと内心大おおに驚ろくと主人は笑いながら「あれは奉納の鴉です。昔しからあすこに飼っているので、一羽でも数が不足すると、すぐあとをこしらえます、それだからあの鴉はいつでも五羽に限っています」と手もなく説明するので、余の空想の一半は倫敦塔を見たその日のうちに打ち壊こわされてしまった。余はまた主人に壁の題辞の事を話すと、主人は無造作むぞうさに「ええあの落らくが

書きですか、つまらない事をしたもんで、せつかく奇麗な所を台
なしにしてしまいましたねえ、なに罪ざい人の落書だなんて当あてにな
ったもんじゃありません、贖にせもだいぶありませんと澄すました
ものである。余は最後に美しい婦人に逢あった事とその婦人が我々
の知らない事やとうてい読めない字句をすらすら読んだ事などを
不思議そうに話し出すと、主人は大に軽けい蔑べつした口調くちようで「そり
や当り前でさあ、皆んなあすこへ行く時にや案内記を読んで出掛
けるんでさあ、そのくらいの事を知ってたって何も驚くにやあた
らないでしょう、何すこぶる別べつ嬪びんだつて？——倫敦にやだいぶ
別嬪がいますよ、少し気をつけないと險けん呑のんですぜ」ととんだ所
へ火の手が揚あがる。これで余の空想の後半がまた打ち壊わされた。

主人は二十世紀の倫敦人である。

それからは人と倫敦塔の話しをしない事にきめた。また再び見物に行かない事にきめた。

この篇は事実らしく書き流してあるが、実のところ過半想像的の文字であるから、見る人はその心で読まれん事を希望する、塔の歴史に関して時々戯曲的に面白そうな事柄を撰んで綴り込んで見たが、甘く行かんで所々不自然の痕迹が見えるのはやむをえない。そのうちエリザベス（エドワード四世の妃）が幽閉中の二王子に逢いに来る場と、二王子を殺した刺客の述べ懐の場は沙翁の歴史劇リチャード三世のうちにもある。沙翁はクラレンス公爵の塔中で殺さるる場を写すには正筆を用

い、王子を絞殺こうさつする模様をあらわすには、仄筆そくひつを使つて、刺客の語を藉かり裏面からその様子を描びよう出しゅつしている。かつてこの劇を読んだとき、そこを大おおに面白おおいく感じた事があるから、今その趣向をそのまま用いて見た。しかし対話の内容周囲の光景等は無論余の空想から捏ねつ出しゅつしたもので沙翁とは何らの関係もない。それから断頭吏だんとうりの歌をうたつて斧おのを磨とぐところについて一いち言げんしておくが、この趣向は全くエーンズウォースの「倫敦塔ロンドンとう」と云う小説から来たもので、余はこれに対して些さ少しょうの創意をも要求する権利はない。エーンズウォースには斧おのの刃のこぼれたのをソルスベリ伯爵夫人を斬る時の出来事のように叙してある。余がこの書を読んだとき断頭場に用うる斧の

刃のこぼれたのを首斬り役が磨といでいる景色などはわずかに一
二頁に足らぬところではあるが非常に面白いと感じた。のみな
らず磨ぎながら乱暴な歌を平気でうたっていると云う事が、同
じく十五六分の所作ではあるが、全篇を活動せしむるに足たるほ
どの戯曲的出来事だと深く興味を覚えたので、今その趣向その
ままを踏とう襲しゆうしたのである。但ただし歌の意味も文句も、二吏の
対話も、暗あん窖こうの光景もいっさい趣向以外の事は余の空想から
成ったものである。ついでだからエーンズウォースが獄門役に
歌わせた歌を紹介して置く。

The axe was sharp, and heavy as lead,

As it touched the neck, off went the head!

Whir—whir—whir—whir!

Queen Anne laid her white throat upon the block,

Quietly waiting the fatal shock;

The axe it severed it right in twain,

And so quick—so true—that she felt no pain.

Whir—whir—whir—whir!

Salisbury's countess, she would not die

As a proud dame should—decorously.

Lifting my axe, I split her skull,

And the edge since then has been notched and dull.

Whir—whir—whir—whir!

Queen Catherine Howard gave me a fee, —

A chain of gold—to die easily:

And her costly present she did not rue,

For I touched her head, and away it flew!

Whir—whir—whir—whir!

この全章を訳そうと思つたがとうてい思うように行かないし、かつ余り長過ぎる恐れがあるからやめにした。

二王子幽閉の場と、ジェーン所刑の場については有名なるドラロツシの絵画がすくなくならず余の想像を助けている事を一言^{いちげん}していささか感謝の意を表する。

舟より上^{あが}る囚人のうちワイアットとあるは有名なる詩人の

子にてジエーンのため兵を挙げたる人、父子どうみよう同名なる
 故まぎ紛れ易やすいから記して置く。

塔中四辺の風致景物を今少し精細に写す方が読者に塔その物を紹介してその地を踏ましむる思いを自然に引き起させる上において必要な条件とは気がついてゐるが、何分かかる文を草する目的で遊覧した訳ではないし、かつ年月が経過しているから判然たる景色がどうしても眼の前にあらわれにくい。したがってややともすると主観的の句が重ちようふ複くして、ある時は読者に不愉快な感じを与へはせぬかと思ふところもあるが右の次第だから仕方がない。(三十七

年十二月二十日)

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年10月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：LUNA CAT

2000年8月31日公開

2004年2月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

倫敦塔

夏目漱石

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>